

リザベーションからの「逃走」

— *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* に見る

ネイティヴ・アメリカンのアイデンティティー

関根 健雄*¹

Escape from Reservations

— Native American Identity in *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* —

Takeo SEKINE

The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian (2007) deserves to be regarded as an autobiographical story of Sherman Alexie, a Coeur d'Alene/Spokane Native American songwriter, filmmaker, comedian and writer of prose and poetry. Its theme is to escape from the reservations that were constructed to eliminate Native American and still serve that nefarious influence. The protagonist, Arnold Spirit, Jr., the fourteen-year-old Spokane Indian, decides to leave the hopeless reservation and go to the high school in the white town of Reardan in search of *something* hopeful. In this novel, the evocation of empathy, love and forgiveness contributes to Arnold in establishing his identity beyond the ethnicity, this must be the result of his "expanded world-view" by crossing the borders. The aim of this paper is to examine how the protagonist establishes his own "multi-tribal" identity by leaving reservations.

KEYWORDS : Native American, Reservation, Sherman Alexie, Border

はじめに

主人公の Arnold Spirit Jr. がリザベーション (ネイティヴ・アメリカン居留地) の高校を出て「白人」の高校に転校し、自らの部族から白眼視されながらも新しい世界を知ることによってアイデンティティを確立していく *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* (2007) はネイティヴ・アメリカン作家 Sherman Alexie の初のヤングアダルト向け小

説として全米図書館賞 (National Book Award, 2007) やボストングローブ・ホーンブック賞 (Boston Globe - Horn Book Award, 2008) を受賞した作品であり、そのテーマはより良い人生を勝ち取るためのネイティヴ・アメリカンの悲慘な現状からの「逃走」だ。リザベーションを出て教育を受け、詩人、小説家、映画製作者として活躍する Alexie 自身も本作の 78 パーセントが実話であると語る¹⁾ように、この物語は作者である Alexie の自伝的小説である。本作には、貧困やアルコール依存症、事故、喧

*1 一般科 (Dept. of General Education), E-mail: sekinetakeo@oyama-ct.ac.jp

嘩の末の死などの悲惨なリザベーションの描写が頻出する。こうした現代のネイティヴ・アメリカンの悲哀に満ちた姿とそれらを象徴するリザベーションの現実がAlexieの作品に頻出するものであるが、初期の作品と比較すると本作で描かれるリザベーションには差異が見受けられる。初期のAlexieの作品はリザベーションでのネイティヴ・アメリカンの窮状を叩き付けるように綴り、以下の引用に見えるようにまさに「怒り」に満ちていた。

Survival = Anger × imagination. Imagination is the only weapon on the reservation²⁾.

Alexieは本作において、「怒り」と「想像力」で悲惨なリザベーションの現実をなんとか「生き抜く」姿を描くのではなく、主人公Arnoldをリザベーションから「逃走」させ、より良い人生を勝ち取ろうと奮闘する少年を描く。希望を求めてリザベーションを出立するArnoldは「旧世界」を旅立ち「新世界」に希望を求めて渡航しアメリカを建国した入植者たちに自分を重ねる。しかし、Arnoldは成長の過程において「旧世界」と完全に断絶することはなく、アメリカという国家がネイティヴ・アメリカンに対して行ったように他者を否定し、力で打ち倒すことでアイデンティティを勝ち取るわけでもない。彼は友人、知人だけではなく、自分が憤っていたネイティヴ・アメリカンの現状を許容することで成長していくのである。これはAlexieの初期の作品には見られなかった作家としての大きな変化だ。

本論は*The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian*をネイティヴ・アメリカンの歴史的背景や基となったAlexieの生い立ちや作品の変化と関連付けながら主人公Arnoldがアイデンティティを確立していく過程を分析し、リザベーションから「逃走」することの意義を考察していく。なお、本論に原文や歴史的背景、また著者であるAlexieが迫害の歴史を表す言葉として用いていることを尊重し「インディアン (Indian)」という呼称を用いる場合もあるが、そこに差別的意図はないことをここに明記する。

1. リザベーションからの「逃走」

“Why are you leaving?”

“I have to go. I’m going to die if I don’t leave³⁾.”

水頭症で生まれ、手術をしたものの様々な後遺症や吃音を抱えたがりがりの末端肥大症のArnold Spirit, Jr.は、発作に脅えながらリザベーションで生活していた。周囲のからかいの的であり、友人と言えるのは乱暴者のRowdyだけだ。家も貧しく、食事も満足に取れない事もある。アルコール依存症の両親と地下室に引きこもっている姉に囲まれ、ネイティヴ・アメリカンは夢もなく、貧困の中で何もかも諦めるしかないことに憤りを感じていた。

ある日、数学の教科書に自分の母親の名前が書かれていることに気付く。30年も前の教科書を繰り返し使っている部族の貧しさに憤り、彼は教科書を怒りにまかせて投げつけ、それがP先生に当たり停学処分となる。謹慎中のArnoldを訪れたP先生は、多くのネイティヴ・アメリカンが希望を捨ててしまった中、Arnoldだけは希望を失わず、病氣や彼をからかう人間と戦い続けてきたことの重要性を伝える。しかし、そのままりザベーションにいたのではいつか戦いに敗れ、希望を失ってしまう。それ故、人生を諦めずに生きるにはリザベーションの外の世界に行くしかないと諭す。忠告を受けた彼は22マイル離れた「白人」の優良校、Reardanへ転校する決意をする。

著者であるSherman Alexieは1966年、ワシントン州のSpokane Indian ReservationのWillpinitに生まれた。Arnoldと同じく水頭症で生まれ、14歳の時に生徒全員が「白人」であるReardanに転校している。そこではネイティヴ・アメリカンは彼ひとりであったが、バスケットボール選手、弁論大会のチャンピオン、クラスのリーダーとして活躍した。高校卒業後はGonzaga大学に進学するも馴染めず、アルコール依存症になり退学している。その後、シアトルで働いていた彼は21歳の時にワシントン大学に入学し最初は医者道を志すが、挫折、成り行きで詩制作の授業を履修したことを機に表現者としての道を歩み出し、詩や小説、映画製作など多くの作品を生み出していくこととなる⁴⁾。また、Arnoldが自分の母親の名前を教科書に見つけたエピソードはAlexieの実体験であると語られる⁵⁾ことからわかるように、本作品は著者Alexieの自伝的小説だ。彼自身、リザベーションを出ることで自己を確立していったように、主人公Arnoldも新しい世界で成長していく。

ここでリザベーションを去るという描写がネイティブ・アメリカンにとってどのような意義があるのか考察したい。Alexie はリザベーションとそこから Arnold が「逃走」することの意味について以下のように述べている。

The reservation system was created to disappear and murder Indians. And I still think to some large degree that reservations still serve that nefarious function. I think Arnold, by leaving the rez, is escaping a slow-motion death trap⁶⁾.

Alexie が語るように、ネイティブ・アメリカンを一掃するために作られたのがリザベーションである。コロンブスの新大陸発見以来、ネイティブ・アメリカンは「白人」入植者によって土地を奪われ続けてきた。「白人」農場主の土地を確保するために制定された「インディアン強制移住法」(1830)はその土地簞奪を合法化し、移住を拒んでいたチェロキー族を合衆国軍が連行し途中で約 4000 人を死亡させた「涙の旅路」や、6 度の移住を強制された結果人口を半減させたウィネベゴ族などの例は枚挙に暇がなく、その流れは「明白な運命」による西進によって加速し、ネイティブ・アメリカンは土地を失いリザベーションに押し込められることとなった⁷⁾。その後も「野蛮」な文化の破壊とネイティブ・アメリカンを小土地所有農民とすることを目的とした、ドーズ法として知られる「一般土地割当法」(1887)が「白人」入植者による土地強奪を加速させ、1881 年には 1 億 5500 万エーカーあったリザベーションは 1934 年には約 5000 万エーカーにまで減少した⁸⁾。さらに、第二次世界大戦後には連邦政府の財政負担の軽減を目的に、部族政府を解体し土地や資源を搾取する強制的同化政策「連邦管理終結政策」が本格化した⁹⁾。このようにネイティブ・アメリカンの土地や文化を破壊し、産業に適さない僅かばかりの荒地に押しこめた迫害の歴史の象徴がリザベーションだ。Arnold は以下のようにリザベーションを語る。

Reservations were meant to be prisons, you know? Indians were supposed to move onto reservations and die. We were supposed to disappear¹⁰⁾.

「監獄」であるリザベーションが現存してネイティブ・アメリカンを捕え続け、Arnold のような少年が絶望して生きざるを得ないということは、迫害が現在も進行していることを意味する。20 世紀後半、「レッド・パワー」に代表される民族再生運動がリザベーションを出て教育を受けた都市部に住むネイティブ・アメリカンを中心に展開され、その後、法廷での権利闘争や文化復興を通して民族の再生へと繋がった¹¹⁾。そのような歴史的背景を考慮すれば、リザベーションを出て希望を探すこととはネイティブ・アメリカンによるアメリカ主流社会への反抗の開始を意味している。

Arnold のリザベーションからの「逃走」とは、思春期特有の彼個人の「自分探し」の旅の開始を意味するにとどまらず、ネイティブ・アメリカンの民族の再生への第一歩という歴史的背景を内包している。しかし、彼らへの迫害が現存し、民族の再生が未だ達成されていないことから、Arnold の自己の確立までの終わりなき長い闘争の幕開けを強く印象づけるものであるのだ。

2. Reardan とリザベーションの狭間で

Traveling between Reardan and Wellpinit, between the little white town and the reservation, I always felt like a stranger.

I was half Indian in one place and half white in the other.

It was like being Indian was my job, but it was only a part-time job. And it didn't pay well at all¹²⁾.

リザベーションと Reardan を往復しながら、Arnold はリザベーションでは故郷を捨てたものとして白眼視され、Reardan では異分子として無視される。それでも彼は、アメフト選手の大男の Roger を殴り倒したり、「天才」の Gordy と友人になったり、「ブロンド美人」の Penelope と付き合ったりすることで、Reardan において次第にその存在を認められていく。一方、学校以外の生活基盤はリザベーションであり、両親や祖母、父の親友の Eugene など彼を認めてくれる人がいる。つまり彼はネイティブ・アメリカンと「白人」のコミュニティの両方の属性を備えた人間へと変わって

いくのである。

まず, Arnold がリザベーションで使っている"Junior"ではなく, Reardan では"Arnold"として認知されていく描写に着目したい。転校初日, Penelope に名前を聞かれた彼は以下のように説明する。

"My name is Junior," I said, "And my name is Arnold. It's Junior and Arnold. I'm both."

I felt like two different people inside of one body¹³⁾.

新しいコミュニティにおいて, 新しい名前を得ることで新たな構成員として受け入れられるこの描写は, ネイティブ・アメリカンを扱った映画では「ポカホンタス」の逸話やその他の映画でもよくつかわれるステレオタイプな手法だ。ポカホンタスが処刑寸前のスミスを助けたという有名な逸話は, 疑似的な死を経た上で新たな名前を与え, 共同体に迎え入れるというポカホンタスの部族と同じ文化圏のアルゴンキン族に観られる行動様式であり, 疑似的死を経験することでその者を古い関係から解放し, 新たな関係に組み入れる通過儀礼である¹⁴⁾。スミスはこの儀式によって養子となり, "Nantaquoud"という名前と与えられ, 土地を治めることも認められている¹⁵⁾。これは「白人」男性が「新世界」で成功を収める物語として引き継がれ, 何度も書き換えられて他の映画等においても用いられるようになった構造だ。代表的なものとして, *Dances with Wolves*(1990)では主人公 John Dunbar は Lakota Sioux から"Dances with Wolves"という名を貰い¹⁶⁾, *Avatar*(2009)では主人公 Jake Sully は"Jakesully"という名を与えられる¹⁷⁾ことでコミュニティの構成員として受容される描写が存在する。それは同時に, 「旧世界」では認められなかった者がヒーローとして成功することが約束されることも意味する。ネイティブ・アメリカン映画で新たな名を与えられた「白人」は後に部族を救う英雄として描かれる傾向がある。そこには, 移動し, 革新し, 進歩することを理想とする, 人々を「移動」に駆り立てる価値観や歴史観がアメリカという国家を形成する一つの観念として存在しており, ピューリタンの入植者たちや「明白な運命」に代表されるような「移動」を肯定し内面の向上と結びつける固有の価値観がアメリカを形成する根本的な観念として存在する¹⁸⁾が見て

取れる。つまり, Arnold がリザベーションという古い世界から「逃走」し, 新たなコミュニティへと「移動」することで成長し自己を確立していく過程は, アメリカの根幹にかかわる行動様式でもあり, Alexie が次のように語ることからもそれは意図された表現であることは明らかだ。

It really is an American immigrant tale. I was indigenous to the land, but I was an immigrant into the culture. An indigenous immigrant. An ironic indigenous immigrant, who loves alliteration¹⁹⁾.

しかし, 行動様式が酷似していても「白人」入植者たちとネイティブ・アメリカンである Arnold ではその意義は異なる。アメリカ黎明期への郷愁や自然主義的観点からネイティブ・アメリカンのコミュニティを訪れる「白人」男性とは対照的に, Arnold は「白人」のコミュニティに「移動」することを選ぶ。ネイティブ・アメリカンを駆逐し拡大することによって形成された「移動」に象徴されるアメリカ主流社会の文化を, 正に被害者であるネイティブ・アメリカンの少年が体现することは十分に「皮肉」だ。コロンブス以来ネイティブ・アメリカンたちがリザベーションへと追い立てられていった道を遡上するという迫害の歴史に対する反抗であることに加え, 自らの民族の衰退と表裏一体のアメリカという国を形成した「移動」の観念をも立場を転換して自らに取り込んでいる。

さらに, Arnold の「移動」が「旧世界」から「新世界」への片道切符ではなく, リザベーションと Reardan の間を, 毎日時間をかけて, 車で, バイクで, 時には徒歩で往復する点が重要だ。彼は Junior から Arnold へと変わるのでなく, 両方ともに彼自身である。それは Arnold が両方の世界を自分の中に取り込んでいくことを意味している。このような一元的でない人物造形は, Alexie の実体験に加え, 9.11 以後の原理主義への危機感も影響していることが以下の引用からは読み取れるだろう。

Ever since 9/11, I have worked hard to be very public about my multi-tribal identity. I think fundamentalism is the mistaken belief that one belongs to only one tribe; I am the opposite of that²¹⁾.

Alexie は自らについて“I was fundamentalism.”であり “So having children, having friends, my life diversifying” と語るように²²⁾、初期の作品においては迫害や貧困に対する「怒り」が、時に過剰に押し出されていた。しかし様々な経験によって多様性を手に入れた。本作における Arnold が体現するように、異なるコミュニティ、価値観の間を揺れ動き、人と関わることで多様化し、また変化する自己に気付いた結果である。

こうした Arnold の変化は、「同化」という一元化を強制してきたアメリカ主流社会への批判であり、過去の Alexie 自身の姿勢や作品に対する回答だ。旧世界か新世界か、「白人」かネイティブ・アメリカンか、といった二者択一をするのではなく、自分の中に異なる新しい世界を次々と取り込んで成長していくしなやかさこそ、Alexie が自らの経験から学び、Arnold に託したものであろう。

3. 共感, 許容, 和解

I realized that sure, I was a Spokane Indian. I belonged to that tribe. But I also belonged to the tribe of American immigrants. And to the tribe of basketball players. And to the tribe of bookworms²²⁾.

Arnold は、バスケットボールの学校代表チームのメンバーに選ばれる。1 度目の Willpinit との試合ではかつての親友 Rowdy に殴られて昏倒し退場してしまうが、2 度目の試合で彼は雪辱を誓う。彼にとっては単なるバスケットボールの試合ではなく、悲惨な人生を諦めずに生き抜くことを証明するための「闘争」であった。試合では Willpinit のエース Rowdy を抑える活躍を見せ、Reardan の勝利の立役者となるが、バスケットボールの試合に勝利を収めた後、彼は自らがネイティブ・アメリカンを打ちのめしてしまったことに気づき、激しく動揺する。

Arnold にとってこの試合が単なるスポーツではないように、Spokane のネイティブ・アメリカンにとってもスポーツの試合以上の意味を持っていた。リザベーションの惨状でなんとか生き延びている Spokane たちにとって、バスケットボールの試合は自分たちよりもはるかに裕福な「白人」に

一矢報いる機会であり、生き延びていくための希望でもあった。会場に押し寄せた Spokane たちが敗北によって打ちのめされた姿を目の当たりにし、Arnold は自分自身がネイティブ・アメリカンであることを強く意識する。「白人びいき」と自分を馬鹿にしたリザベーションに囚われた者たちに復讐しようと、怒り、憤慨していたことを強く恥じる。

ここまで考察してきたように Arnold は「怒り」を持ってリザベーションから「逃走」し、リザベーションと Reardan という二つの世界を往復することで両義的な自己を意識するようになった。祖母や Eugene など家族の死に対して Reardan の「白人」の友人たちもが共感し彼を気遣ってくれたことで、「人種」や住む世界の違いで彼自身が自らを束縛していたことも自覚した。そして Willpinit とのバスケットボールの試合は、彼が自らの民族を外から見つめることで自己の民族性を再確認し、リザベーションという忌避すべき現実をも拒絶するのではなく自らのアイデンティティに不可欠な要素として許容していく転機となった。Alexie が “As an Indian the idea of the reservation is always there²³⁾.” と語るように、民族としての迫害の歴史や悲惨な現実を象徴するリザベーション抜きに彼らのアイデンティティを語ることはできないと考えていることがわかる。

So I think my new characters carry that idea of borders into their love lives and into their new lives. Even if they can be successful, the idea of borders goes beyond their ethnicity and into their personal decisions, and they limit themselves in other ways. Love for me has always been political. It has always been informed by the reservation, and it still is. I guess some of my characters are trying to get away from that²⁴⁾.

リザベーションとは物理的に離れられても、断絶できるものではなく、Arnold は Rowdy とバスケットボールをして和解することを通して嫌悪していた自らの民族とリザベーションを許容していく。彼は Reardan の白人コミュニティ、リザベーションのネイティブ・アメリカンのコミュニティだけではなく、自分が様々な“tribe”に属しているのだと自覚し列挙していく²⁵⁾。それは彼が新しいアイデンティティを獲得したことを意味している。そ

して彼がそのアイデンティティを獲得できたのは嫌悪していた自らの民族を共感し、許容できたからだ。彼の変化は祖母と Eugene, 姉の墓参りの場面に表れている。

But I was crying for my tribe, too. I was crying because I knew five or ten or fifteen more Spokanes would die during the next year, and that most of them would die because of booze.

I cried because so many of my fellow tribal members were slowly killing themselves and I wanted them to live. I wanted them to get strong and get sober and get the hell off the rez²⁶⁾.

彼の祖母は飲酒運転の車にはねられて亡くなり、父の親友 Eugene は酒の席での喧嘩で撃たれ、姉はパーティーで泥酔して火事から逃げられなかった。彼らは酒、つまりはリザベーションの惨状の被害者である。しかし、この言葉からは Arnold が当初抱いていたような「怒り」は感じられず、自らの民族に対する愛情と共感、許容が感じられる。Nygren が指摘するように、彼自身の“expanded world-view”の結果、Alexie にとって「地理的」な境界であったリザベーションは「精神的」な領域へとその存在意義を変えたのだらう²⁷⁾。それは彼の初期の作品が「怒り」に満ちていたことに比べ、次第に共感や許容、和解といったものへ傾倒していったことにも繋がっている。また、Alexie は“tribe”とリザベーションという言葉を用いて次のようにも述べている。

But I would also love my readers to recognize that a small white “mainstream” town can be a kind of death trap, too. If Gordie and Penelope, two Arnold’s white friends, I think they’d feel just as trapped by their town and “tribe” as Arnold feels by his. Metaphorically, we all grow up on reservations, don’t we?²⁸⁾

このような彼の考えからは、リザベーションや“tribe”という、人を束縛する境界という概念をネイティブ・アメリカンの範疇に留めずに普遍化していることは明らかだ。そのことが多くの読者の共感を呼び、本作の受賞に繋がったのだらう。

本作の最後、仲違いしていた Rowdy と互いに許し合い、リザベーションでバスケットボールに興

じる Arnold の姿が描かれる。そこで Rowdy は Arnold を“nomadic”と形容する²⁹⁾。そこで読者は、一つの価値観、一つの“tribe”に縛られることなく、常に新しいことを追い求め続け、それらに共感し、許容していくことを通して成長していく思春期の少年の伸びやかさに気づかされる。彼の中には常にリザベーションというネイティブ・アメリカンの民族性の核が存在しながらも、二度とリザベーションという監獄に囚われないであろう Arnold の成長に共感するのである。

まとめ

Alexie にとってリザベーションとは現在も進行する迫害そのものであり、脱出すべき世界であると同時にネイティブ・アメリカンにとってのアイデンティティとは不可分の民族としての記憶の象徴である。Arnold はリザベーションから「逃走」して「白人」の高校に通い、「新しい世界」を経験し視野を広げたことで自分にとっての「民族」やリザベーションの意義を自覚する。本作で描かれる彼の成長からは、彼が将来にわたって常に“nomadic”に世界を広げ続け、再びリザベーションに囚われないであろう力強ささえ感じられる。

また、Arnold の変化は Alexie の作家としての変化でもある。Arnold がリザベーションで生き抜くための「怒り」から出発し、様々なものとの対立、闘争を経て、共感や許容、和解へと至っていくように、作家としての Alexie も同様の道程を辿って変化している。そして様々なものを受け入れながら自分自身の民族性、アイデンティティの核ともいえるリザベーションの上に立脚している。

Survival is a low hope. I don’t want just survival, or “survival.” I want triumph!³⁰⁾

Alexie がこのように語ることからも、彼の初期の登場人物のように、リザベーションの窮状でもがき、何とか「生き残る」ことを目的とするのではなく、より良い生活を勝ち取るために Alexie の出した答えが、共感や許容であったのだ。そして彼は Arnold を通してネイティブ・アメリカンだけでなくすべての人がより良い人生を勝ち取るための出発点としての、それぞれのリザベーションからの「逃走」を読者に提示したのだらう。

自己を確立していく Arnold の姿は、希望もなくリザベーションに囚われたネイティブ・アメリカンという民族への、そして同様に自分自身を縛るものから逃れようともがき苦しんでいる人々へのメッセージである。それが自己の確立に悩み、揺れ動くヤングアダルトの年代の読者に響いたのだろう。

参考文献

- 1) Boston Globe-Horn Book Award Acceptance,
http://archive.hbook.com/magazine/articles/2009/jan09_alexie.asp)
- 2) Alexie, Sherman. *The Lone Ranger and Tonto fistfight in heaven*. New York: Harper Perennial, 1994. , p. 150.
- 3) Alexie, Sherman. *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian*. London: Anderson Press Ltd., 2008, p. 52.
- 4) Grassian, Daniel. *Understanding Sherman Alexie*. Columbia: U of South Carolina, 2005 , pp.1-5.
- 5) Boston Globe-Horn Book Award Acceptance.
- 6) Tanita Davis and Sarah Stevenson, “Sherman Alexie.” ; Peterson, Nancy, J. ed., *Conversations with Sherman Alexie*, 2009, Jacson: U of Mississippi, p. 189.
- 7) 富田虎男『アメリカ・インディアンの歴史 第3版』雄山閣, 1997, pp.135-55.
- 8) *Ibid.*, pp. 168-76.
- 9) *Ibid.*, pp. 194-97.
- 10) *The Lone Ranger and Tonto fistfight in heaven*, p. 216.
- 11) 内田綾子『アメリカ先住民の現代史 歴史的記憶と文化継承』名古屋大学出版会, 2008, pp. 73-106.
- 12) *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* , p.118.
- 13) *Ibid.*, pp. 60-61.
- 14) Gleach, Frederic. W. *Powhatan's World and Colonial Virginia: A Conflict of Cultures*. Lincoln, NE: Univ. of Nebraska Press, 1997, pp. 106-122.
- 15) Smith, John. *The Complete Works of Captain John Smith, 1580-1631*. Ed. Philip L. Barbour. 2 vols. Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1986, pp.149-152
- 16) *Dances with Wolves*. DVD. Dir. Kevin Costner. Written by Michael Blake. Starring Kevin Costner. TIG productions, Inc., 1990. Tokyo: Tohokushinsha Film Corporation., 181min.
- 17) *Avatar*. DVD. Dir, Written by James Cameron. Starring Sam Worthington, Zoë Saldña. Twentieth Century Fox Film Corporation and Dune Entertainment LLC., 2009. Tokyo: Twentieth Fox Entertainment Japan. Ltd., 162min.
- 18) 高橋勤「アメリカン・ヒーローと進歩思想」山里勝己 編著『〈移動〉のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房, 2011, pp.45-63.
- 19) Boston Globe-Horn Book Award Acceptance.
- 20) Davis and Stevenson, p. 190.
- 21) *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian*, p. 217.
- 22) Nygren, Åse. “A World of Smoke: A Conversation with Sherman Alexie,” : Peterson, Nancy, J. ed., *Conversations with Sherman Alexie*, 2009, Jackson: U of Mississippi, p.156.
- 23) *Ibid.*, p.156.
- 24) *Ibid.*, p.155
- 25) *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian*, p. 217.
- 26) *Ibid.*, p. 216.
- 27) Nygren, p.142.
- 28) Davis and Stevenson, p. 189.
- 29) *The Absolutely True Diary of a Part-Time Indian*, p. 229.
- 30) Nygren, p.146.

【受理年月日 2013年 9月30日】

